

①

「(……)言ってるらん、おまえはわたしがいびく醜いと思ってるだろうね？」

「ほんとうですわ」とベルが言いました。「だってあたくしには嘘がつけないんですもの。でも、あなたってとってもいい方だと思うわ」

「おまえの言うとおりでね」と野獣が言いました。「でも、わたしは醜いだけじゃあない、その上に知恵もないんでね。自分でもよくわかるんだ、わたしはただのバカにすぎないんだ、ということがね」

「バカだなんてとんでもない」とベルが続けました。「だってご自分で知恵がない、とお考えになっっているくらいですもの。愚かなひとつで、自分じゃそんなこと、ぜったいわからないものですよ」

「とにかく食事をしなさい、ベル」と野獣が申しました。「それになるべくこの屋敷で退屈しないようにね。だって、ここにあるものはなんでもおまえの自由に使っていいんだから、それに、おまえが物足りないなんていったら、わたしはきつと悲しくなるだろうからね」

「あなたってほんとうにいい方ですわ」とベルが言いました。「正直に言って、あなたのそんなお心づかいがほんとうに嬉しいんです。そう思うと、あたくしにはあなたが醜いようには見えませんわ」

「もしわたしに知恵があったら」と野獣が言いました。「わたしの感謝の気持ちを、うんとじょうずな言葉で言い表わせるんだが。でも、わたしに言えることはこれだけだよ、つまり、わたしはおまえに心から感謝している、ってね」

②

ところが、ベルはほんとうに驚いてしまいました！野獣の姿は消えてなくなり、今はもう、ベルの足もとに横たわっていたのは、「愛の神」よりももっともつとハンサムな、ひとりの王子の姿だけでした。そして王子は、自分にかげられた魔法をといっていたてありがとう、とベルに感謝するのです。この王子の美しさがベルの目をひいたことはもちろんですが、そんなことはおかまいなく、ベルはどうしても、王子に、あの野獣はどこへ姿を消したのですか、と尋ねずにはいられませんでした。

「あなたの足もとにおりますよ」と王子が申しました。「意地悪な仙女がおりましたね、ぼくがあんな姿になるように、むりやりぼくに言い渡したんですよ、ただ、だれか美しいお嬢さんがぼくと結婚するのを承諾するまでということでしたがね、そればかりではないんです、ぼくは自分の頭を働かせてもいけない、といって禁じられていたんです。そんなわけで、この世の中に、ぼくの性質の良さがわかってくれるほど、心のりっぱなひとはあなたひとりしかいなかったんです。たとえぼくの王冠をあなたにさし上げても、まだまだ、ぼくがあなたに受けたご恩を返しきれないくらいです」

ベルはまたびっくりしましたが、今度はとても気持ちのよい驚きでした。そしてこのハンサムな王子に手をのばして、王子を起ち上げさせました。

二人は仲よくそろってお城へまいりましたが大広間に父親をはじめ、家族の者がみんなそろっているのを見て大喜びでした。いつかベルの夢のなかに現われたあの貴婦人が、ベルの家族をこの城へ連れてきたのです。

「ベルや」とその貴婦人が申しました。この貴婦人は実はえらい仙女だったのです。「サア、ここへいらっしやい、あなたが選んだひとはりっぱなひとですよ、サア、ごほうびを上げますよ。あなたは見かけだけの美しさとか、才気よりも、りっぱな心を選んだのですね、そんな心掛けのおかげでそういう長所をすべてかねそなえたりりっぱなひとにめぐり会えたのですよ。あなたはきつとすばらしい女王さまになりますよ、でも女王さまの位についたからといって、いい気になって、あなたの持つて生まれたりっぱな心を忘れないようにね」

「美女と野獣」

『美女と野獣』鈴木豊訳（角川文庫）